

## 生まれて始めての行商

昭和二十年九月、終戦で復員、二十三年四月仙台無線電信講習所に入學するまで、生家で農業を手伝っていた。

兄は手先が器用だった、農閑期には、竹細工で、かご・箕(み)等を作り。藁(わら)細工では、みの。藁草履等を作っていた。私が農閑期を利用して坂本磯浜に兄の作った箕を五枚程背負い、自転車で行商に行った事がある。

磯浜に母の妹、叔母の嫁ぎ先、星栄吉宅がある。叔父は小学校校長で定年退職、悠悠自適の生活を送っていた。自転車で磯浜まで三時間以上はかかる。それに幅の広い箕を背負うのだから、風があると大変だった。

叔母の名前は、つね、だが誰もが、「つねこ叔母」と言っていた。叔父は妻を亡くし叔母と再婚して、あの頃小学生の光男チャンがいた。先妻との間には東北大学理学部を卒業、大学院の博士課程で学んでいる「武夫」さんがいたが、仙台で下宿、磯浜では会った事がなかった。私が電波学校在学中お付き



合いをした。大学院を卒業後金沢  
大学で教鞭をとり。後教授になっ  
たと、風の便りで聞いた。

つねこ叔母に気持ちよく世話  
して戴き、磯浜部落を売り歩いた  
が、さっぱり売れない。寂しさど、  
虚しさ、情けなさを身に沁みて、  
生まれて初めて感じた。磯浜には  
二晩泊めて貰い、売れない箕を背  
負い生家に帰った。

その後塩作りを手伝いながら、  
行った。農家では毎年自家使用の  
味噌を作る。大量の塩が必要だ。  
叔父が海岸に塩作りの釜場を作  
って居た。あの当時塩は大量には  
手に入らない。釜場と言っても大  
きい石をコの字に並べ一米×二  
米深さ二十センチ位の鉄板で作  
った箱を乗せ、海水を両天秤で運  
び釜に入れる。



叔父の家には松山があった。それを私が切ってリヤカーで運び、叔父は火をドンドン燃して海水を煮詰める。朝焚きつけて、夕方まで何回も汲んで来ては煮詰めて繰り返す。夕方になると塩の結晶が二十キロ位出来上がる。箆等に掬い上げにがりを切り、塩の製品が出来上がる。

浜辺の露天だから休みだ、砂浜だから海水汲みもヨタヨタ歩き、海水も綺麗な遠浅だった。

結婚して子供達が二・三才の頃親子四人して亡くなった叔父のお墓参りに行った。高台にある避難館や砂浜の海岸で子供達を遊ばせ、多く写真を撮り、叔父を偲んだ。

平成十四年八月三十一日

